

博多193

—博多遺跡群第226次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1481集

2023

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1481 集

博多 193

— 博多遺跡群第 226 次調査報告 —



遺跡略号 HKT

調査番号 1903

2023

福岡市教育委員会



I区北半下面全景写真（南から）



II区北半下面全景写真（北から）



I区北半下面土留遺構検出状況（南東から）



I区北半下面包含層漆椀検出状況（南から）

序

福岡市は玄界灘を介して大陸・半島と一衣帯水の関係にあり、古代より双方の交流が絶え間なくおこなわれてきました。そのため市内には、数多くの歴史的な遺産が存在します。しかし、近年の著しい都市化により失われるこれらの文化財を後世に伝えることは、本市の重要な責務です。

本書は、ビル建築にともなう博多遺跡群第226次発掘調査について報告するものです。今回の調査では木樋や土留板など中世の埋め立てにともなう遺構を検出することができました。これらは中世の土木技術を知る上での手がかりとなるとともに、博多遺跡群における居住域の拡大を知る重要な資料となるものです。今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、照栄建設株式会社様をはじめとする関係者の方々には発掘調査から本書の作成に至るまでご理解とご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

令和5年3月23日

福岡市教育委員会
教育長 石橋 正信

例言

1. 本書は照栄建設株式会社が実施した博多区綱場町107-1、107-2、108におけるビル建設にともなう事前調査として、福岡市教育委員会が平成31・令和元年度に実施した博多遺跡群第226次調査の調査報告書である。
2. 本書で用いる方位はすべて座標北である。
3. 調査時は検出面を3面設定し、検出した遺構については1面が1001～・2面が2001～・3面が3001～から始まる通し番号を付した。整理段階で1・2面を上面、3面を下面とまとめた。本書ではこの番号に遺構の性格を示す用語を付して記述する。遺構の呼称は建物をSB、溝をSD、井戸をSE、土坑をSK、ピットをSP、不明遺構をSXと略号化している。
4. 陶磁器の分類には「大宰府条坊跡X V - 陶磁器分類編 -」2000年太宰府市教育委員会編を用いる。
5. 本書で使用した遺構実測は松崎友理、服部瑞輝、坂口剛毅が作成した。
6. 本書で使用した遺物実測は松崎、鶴来航介、佐藤浩司、井上加代子、大庭智子、熊埜御堂和香子、平川敬治、山本麻里子が作成した。
7. 製図は松崎による。
8. 本書で使用した遺構および遺物写真は松崎が撮影した。
9. 本書の執筆・編集は松崎、佐藤（銅銭）が行った。
10. 本書に関わる記録類・遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・管理されるので活用されたい。

本文目次

I. はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査組織	1
II. 立地と環境	2
III. 調査の記録	4
1. 調査の概要	4
2. 遺構と遺物	8
(I) 下面の遺構と遺物	8
(II) 上面の遺構と遺物	17
(III) その他の特殊遺物	26
(IV) 銅銭	28
IV. まとめ	29

挿図目次

図1 博多遺跡群内調査地位位置図 (1/8,000)	3
図2 第226次調査地点位置図 (1/2,000)	4
図3 壁面土層断面図 (1/40)	5
図4 上面遺構配置図 (1/60)	6
図5 下面遺構配置図 (1/60)	7
図6 下面土留遺構実測図 (1/40)	9
図7 下面土留遺構出土遺物実測図1 (1/3・1/2)	11
図8 下面土留遺構出土遺物実測図2 (1/3・1/2)	12
図9 木樋実測図 (1/40)	13
図10 木樋使用木器実測図 (1/8)	13
図11 SD3014 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	14
図12 SD3007 と関連遺構実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	15
図13 柱列実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	16
図14 SE3022 実測図 (1/60)	17
図15 SE3022 出土遺物実測図 (1/3・1/2)	17
図16 上面土留遺構実測図 (1/40)	18
図17 上面土留遺構使用木器実測図 (1/8)	18
図18 SBI021 実測図 (1/60) および出土遺物実測図 (1/3)	19
図19 上面その他遺構実測図 (1/40)	20
図20 SX1042 実測図 (1/40)	21
図21 上面その他遺構出土遺物実測図1 (1/3)	22
図22 上面その他遺構出土遺物実測図2 (1/3)	23
図23 上面その他遺構出土遺物実測図3 (1/3・1/2・1/1)	24
図24 特殊遺物実測図 (1/3・1/2)	27
図25 出土銅銭のX線写真 (1/1)	28
図26 中世前半の博多遺跡群における道路推定図 (1/1,000)	30

表目次

表1 出土銅銭一覧表	28
------------	----

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、照栄建設株式会社より申請された福岡市博多区綱場町107-1、107-2、108におけるオフィスビル建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を平成30年7月6日付で受理した。申請面積は154.53㎡、受付番号は30-2-317である。

申請地は博多遺跡群の中央やや北寄り、「息浜」の南側端部付近に位置している。埋蔵文化財課事前審査係は試掘調査を実施し、地表面下約230cmで遺構が検出された。この成果をもとに協議を行い、工事によってやむを得ず破壊される154.53㎡を対象に、記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。発掘調査は照栄建設株式会社と福岡市との間で委託契約が締結され、平成31年4月8日に着手、令和元年6月20日に終了した。資料整理および報告書作成については令和2～4年度に行うこととなった。

2. 調査組織

調査委託 照栄建設株式会社

調査主体 福岡市教育委員会

(発掘調査：平成31年・令和元年度 整理報告：令和2～4年度)

調査総括	文化財活用部埋蔵文化財課	課長	菅波 正人
		調査第1係長	吉武 学 (平成31年度～令和2年度) 本田浩二郎 (令和3・4年度)
	文化財活用課	管理調整係	松原加奈江 (平成31年度～令和2年度) 井手 瑞江 (令和3年度) 内藤 愛 (令和3・4年度)
事前審査	埋蔵文化財課	事前審査係長	本田浩二郎 (平成31年度～令和2年度) 田上勇一郎 (令和3・4年度)
		主任文化財主事	田上勇一郎 (平成31年度～令和2年度) 森本 幹彦 (令和3・4年度)
		文化財主事	朝岡 俊也 (平成31年度～令和2年度) 山本 晃平 (令和2・3年度)
		文化財主事	三浦 悠葵 (令和4年度)
発掘調査	埋蔵文化財課調査第1係	文化財主事	松崎 友理

遺跡名	博多遺跡群	調査回数	第226次	遺跡略号	HKT-226	
調査番号	1903	分布地図図幅名	048	遺跡番号	0121	
申請地面積	154.53㎡	調査対象面積	154.53㎡	調査面積	78.1㎡	
調査地	福岡市博多区綱場町107-1、107-2、108		事前審査番号			30-2-317
調査期間	平成31(2019)年4月8日～令和元(2019)年6月20日					

II. 立地と環境

博多遺跡群は畷界灘に面する博多湾岸に形成された砂丘上に立地する。この砂丘は縄文海進以降に形成されたもので、西を博多川、東を石堂川、南は那珂川に流れ込む旧比恵川に挟まれ、地理的に孤立した一角をなす。博多遺跡群の立地する砂丘地形は南から「博多浜」と「息浜」に分けられ、「博多浜」はさらに二列の砂丘で形成される。現在の博多の町はこの砂丘地形上にさらに2～5mほど盛土されて形成されているが、現在も旧地形の形状をよく反映している。本調査地は博多湾岸に近い砂丘列「息浜」の南側端部付近に位置する。

「博多浜」では縄文時代早期の石器や縄文時代後晩期にあたる土器や石器などが包含層で検出されている。遺構の初現は弥生時代前期後半であり、集落と甕棺墓が出現する。この時期の遺構は「博多浜」の南側の砂丘列に集中しており、砂丘の形成が安定し、本格的な土地の利用が開始されたことがうかがえる。古墳時代には砂丘面上に集落が広範囲に展開し、集住が開始し、前方後円墳や方形周溝墓などが出現する。古代には「博多浜」の南側の砂丘で方形区画溝が出現する。それ以降博多浜では各時期の遺構が検出されている。

「息浜」では第5次調査において地表下4.5mの地点で礎石が出土しており、古代段階までは形成途上にある。「息浜」で確認されている遺構は古いもので11世紀代のものである。12世紀初頭には低地が埋め立てられることで「博多浜」と陸繋化しており、12世紀後半には砂丘中央を貫く幹線道路が整備されている。1274（文永11）年の文永の役、1281（弘安4）年の弘安の役という2度にわたる元寇により「息浜」には防塁が築かれ、「息浜」の名は「蒙古襲来絵詞」で初見される。14世紀以降には「息浜」の居住域が拡大するようになる。1333（元弘3）年には鎮西探題が滅亡し、同年8月に大友貞宗が鎮西探題攻略の功を認められ、恩賞として「息浜」が与えられる。1348（貞和4）年には室町幕府が博多を官領所在に指定し、九州の在地勢力を抑え、1371（建徳2）年に今川了俊が鎮西探題として赴任する。1395（応永2）年には今川了俊は解任され、渋川満頼と義俊が鎮西探題に赴任している。1420年の朝鮮使節を迎えるにあたり、市街化整備が行われ、道路が整備されたが、鎮西探題は長続きせず、「息浜」は再び大友氏の支配となった。1350（貞和6）年には中国船が息浜津に着岸したという記事があることから「息浜」が対外交渉の拠点の一つになっていることが推定される。「息浜」に所在していた妙楽寺は1452（宝徳3）年の遣明船派遣の際の遣明使一行の宿泊先として博多における対外交渉の一拠点となっていた。

大友氏は「息浜」を拠点に、朝鮮との貿易を積極的に行い、莫大な利益を得ていたが、博多の入港公事に関する権利は大内氏が握っており、この権利を巡って両氏は度々対立している。1532（天文元）年には大友大内の戦いで、「息浜」は大内氏の支配となった。勘合貿易により大きな利益を生み出すこの地の支配権をめぐる、戦国時代には戦乱を繰り返し、1586（天正14）年に島津氏の焼き討ちにより博多の町は焼き払われた。1587（天正15）年に島津氏征伐に向かう豊臣秀吉によって博多の町は復興することとなる。博多商人の神屋宗湛と島井宗室らによって新しい町割りが形成された。「博多浜」と「息浜」の二つの砂丘間に挟まれた南西側に開く湿地に位置する第29次調査において、16世紀末～17世紀前半に太閤町割に沿った計画的な埋立が行われた痕跡が検出された。これは「石城志」の記述にある1600（慶長5）年の小早川秀秋、1613（慶長18）年の黒田長政による埋立の痕跡と推定され、「息浜」と「博多浜」を隔っていた湿地は17世紀初めに埋め立てられる。

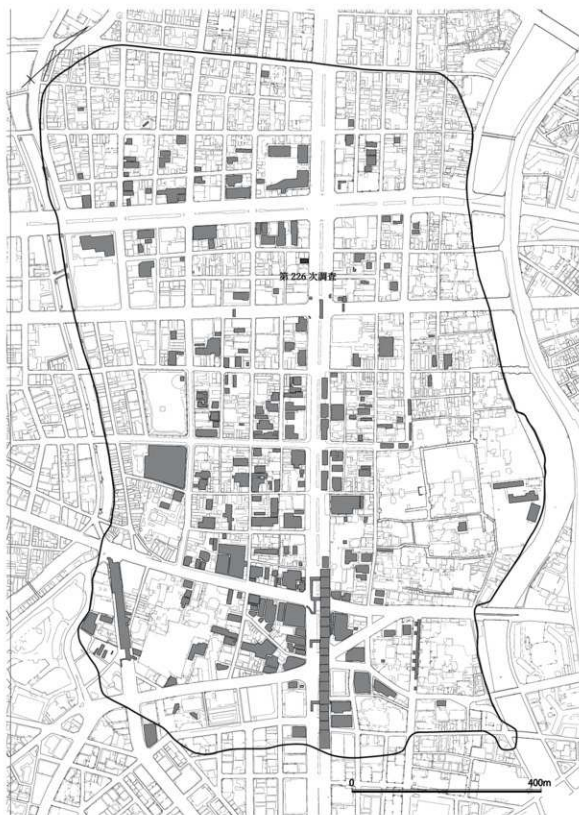


图1 博多遺跡群内調査地位位置図 (1/8,000)

Ⅲ. 調査の記録

1. 調査の概要

本調査地は博多遺跡群の中央よりやや北側に位置し、「息浜」の南側端部付近にある。調査地は大博通りに面しており、調査地前の歩道の標高は約5.1mを測る。地表面から2.6m近く掘取りを行い、標高約2.5mから調査を開始した。西側をⅠ区、東側をⅡ区と設定し、調査区内で反転を行った。

発掘調査は平成31年4月8日に着手した。まずⅠ区上面の遺構検出を開始した。南側では黄褐色粘質土が30～40cm堆積しており、その周囲では根石とみられる石が多数確認された。北側では上面から下面への掘り下げの段階で暗褐色の腐植土が厚く堆積しており、標高約1.65mで木樋が検出された。さらにその下から埋立関連遺構とみられる横板と杭が並行して検出されたため、図化や木器の取り上げに時間を要した。Ⅱ区の土砂は土留遺構が検出されなかったⅠ区の南側で処理することとし、Ⅰ区の埋立関連遺構とⅡ区上面の調査を並行して行った。6月1日にⅠ区の木樋などの検出状況を撮影し、図化を行った後、11日に木器を埋蔵文化財センターに搬出した。12日にⅡ区下面で検出された埋立関連遺構と井戸の撮影を行い、図化と取り上げを行った後、20日に調査を終了した。調査面積は78.1m²、パンケース約70箱分の遺物が出土した。

Ⅰ区では検出面1～3面に分けて調査を行っていたが、3面目で木樋と埋立関連遺構が検出され、2面以降に確認された腐植土が埋立に関連する土層であると判断したため、Ⅱ区では腐植土層により上面と下面に分けて調査を行った。上面で検出された井戸2基はS E 1001が瓦井戸、S E 1062は調査区際で検出されたため未掘であるが井筒を真砂で埋めていたことから近世以降の井戸と判断した。上面では調査区南側で黄褐色粘質土と根石が検出され、土間の可能性が考えられる。また、石基礎が検出され、蔵の基礎に推定される。上面の遺構のほとんどは出土遺物の年代から15～16世紀代に推定される。下面では木樋と土留遺構、井戸などが検出された。下面で検出された遺構は出土遺物の年代から13世紀後半～14世紀前半に推定され、土留遺構から木樋の設置まで明確な時期差は認められない。

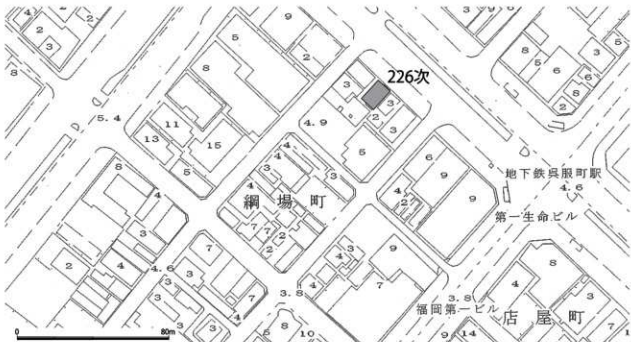


図2 第226次調査地点位置図 (1/2,000)

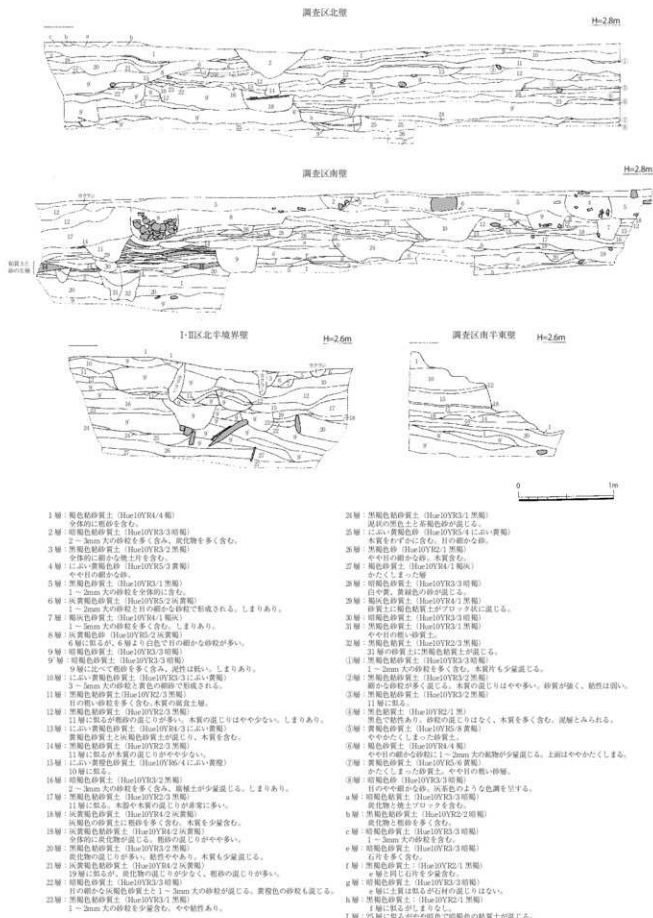


図3 壁面土層断面図 (1/40)

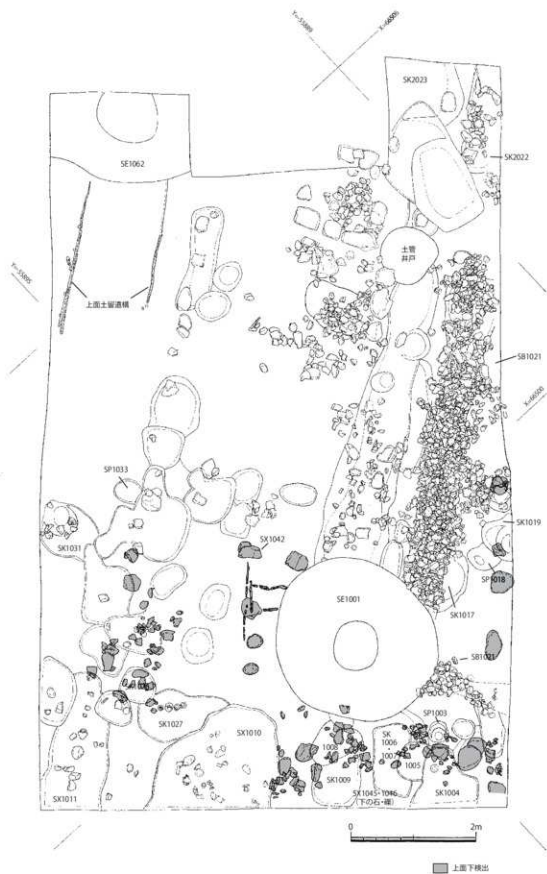


図4 上面遺構配置図 (1/60)

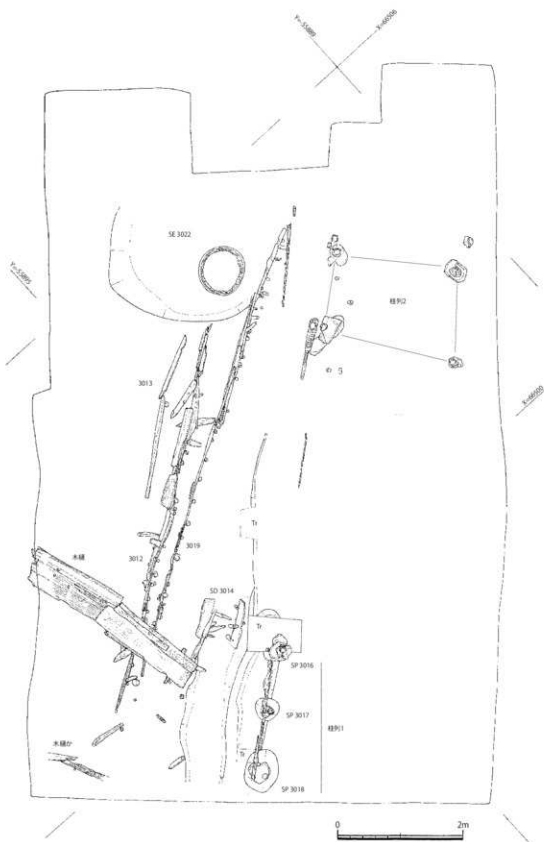


図5 下面遺構配置図 (1/60)

2. 遺構と遺物

(1) 下面の遺構と遺物

(1) 土留遺構 (図6)

調査区中央よりやや北側において横板と杭が東西方向に2列並行した状態で検出された。検出面の標高は約1.3～1.4mと約1.0mと差があり、上段を3012、下段を3019として遺構番号を付した。3012・3019はともに土留遺構と考えられ、3012と3019の横板の内側(北側)は客土とみられる泥土と粗砂で形成された灰茶褐色の粘質土が堆積していた。

3019として取り上げた横板は10枚、杭は40本に及ぶ。横板の中には船体の部材を転用したのも認められ、最大幅は約40cmを測る。杭の最大長は180cmを測る。西側は長大な丸太杭や角杭など、加工された杭が整然と打たれているが、東側は木の節を残した短小な杭が多く、乱雑に打ち込まれている。杭上面の高さは横板の上面の高さにほぼ揃えられており、西側では杭のみが検出されているが、杭同士の間隔や杭上面の高さが共通していることから横板が設置されていた可能性が高い。なお、3019の東側は調査区際の壁面を可能な限り掘削したが、杭や横板は検出できなかった。

3019の東側の横板下面では、人骨が検出された(写真1)。下顎骨で左右ともに第3大臼歯は萌出していない。第1及び第2大臼歯が残存しており、咬耗度は橋原の1°aである。左側第2小臼歯は歯槽が完全に閉鎖しており、生前に歯牙が脱落し、治癒している。咬耗度から若年と考えられる。

3012として取り上げた横板は14枚、杭は21本である。3012の東側はSE3022に削平されたと考えられ、本来は3019に並行して東側に延伸していたと推定される。横板の幅は最大20cmを測り、下段の3019と比べると幅は狭い。幅の狭い横板を使用したためか、西側では3019のように1枚の横板を並べるが、東側では2枚以上の横板を上下に重ねて杭で留めている状況がうかがえる。横板の中には3019と同様に船体の部材を転用したのも認められる。3012内側客土の中には漆器類や箸、下駄などの木器も検出された。箸については大量に検出され、泥土の上に敷くことで足場とした可能性がある。

3013は3012の北側に位置し、3019と3012に並行した状態で横板2枚と杭3本が検出された。3013の横板下面の標高は3019の横板上面の標高とほぼ一致する。3013の横板の内側(北側)には白色砂が敷かれ、その上に3019・3012で使用された泥土と粗砂で形成された客土が堆積していた。このことから、3019の土留遺構で標高1.0mの段階まで一度埋め立てた後、3013の横板を設置し、白色砂を敷くことで足場を確保し、3012の土留遺構で標高約1.3～1.4mまで埋め立てを行った可能性が考えられる。なお、全体を検出できていないが、3012・3019に並行する暗渠が検出された。3012の内側客土に切りこんでいることから3012段階の埋め立て後に暗渠が設置されたと考えられる。3019・3012・3013・暗渠で出土した遺物は一部古代のものも含むが、13世紀後半～14世紀前半に推定され、各遺構間で明確な時期差は認められない。

出土遺物 (図7・8)

1～16は3019に関連する遺物である。1は3019の検出段階で出土した。土師器の台付鉢とみられる。2は3019の内側客土で出土した。土師器小皿で口径9.4cm、底部には回転糸切と板状圧痕が認められる。3～16は3019横板南側の杭周辺で出土した遺物である。3は白磁碗で内面見込みの軸が掻き取られる。白磁碗Ⅲ類にあたる。4・5は白磁皿。4は内面に花文状のヘラ描きが認められる。白磁皿Ⅵ類か。5は口縁端部が口壳で白磁皿



写真1 3019周辺出土人骨

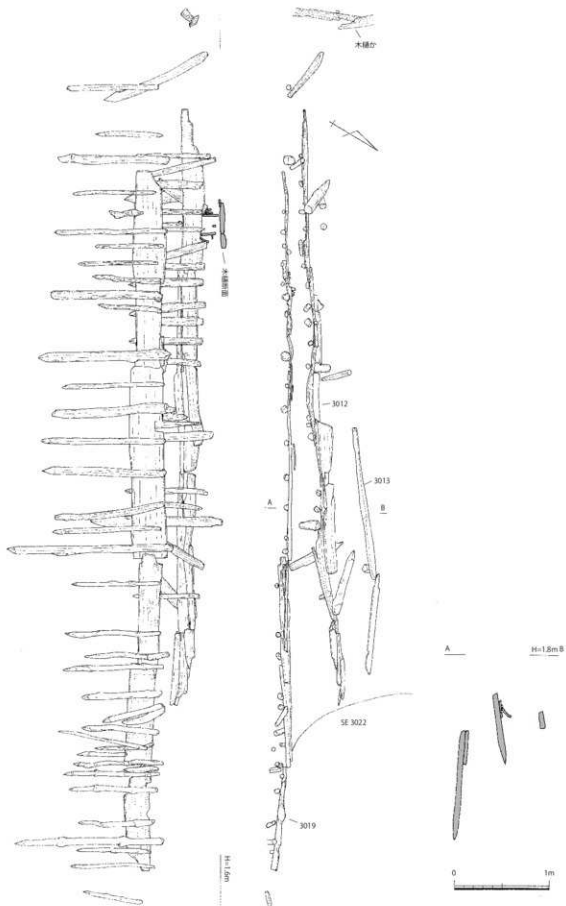


图6 下面土留遺構実測図 (1/40)

Ⅸ類にあたる。6・7・8は龍泉窯系青磁碗である。9はⅠ-2a類にあたり、底部には墨書がみられる。10は龍泉窯系青磁碗Ⅲ-3b類にあたる。11は土師器小皿で口径7.6cm、底部には回転糸切がみられる。12は黒色土器B類碗で在地産とみられる。13は畿内系瓦器碗。口縁部内面に沈線が走り、底部内面にはジグザグ状のヘラミガキが施される。楠葉産と推定される。14は丸瓦で凸面に縄目痕、凹面に布目痕が認められる。15は滑石製石鏝で部分的にスガ認められることから石鏝の再加工品と考えられる。16は砥石である。花崗岩製か。

17～29は3012に関連する遺物である。17～19は木桶を取り上げた後、3012の内側客土上層で出土した。17は白磁皿で口縁端部が口壳、外面体部下位から底部にかけて施軸されていない。底部にはわずかに墨書の痕跡がみられる。白磁皿Ⅸ-2類にあたる。18は土師器小皿で口径8cm、19は土師器坏で口径12.4cmを測る。ともに底部には回転糸切と板状圧痕が認められる。20～22は3012の内側客土で出土した。20は陶器の脚付坏である。胎土には白色粒を少量含み、脚部外面と坏内面にみられる軸は淡緑色を呈する。猿投窯産か。21は東播系須恵器の鉢である。22は陶器の甕で器面は内外ともに褐色を呈する。常滑窯産。23～27は3012の内側客土の下層で出土した。23は白磁皿である。口縁端部は口壳で端部付近にスガが付着する。白磁皿Ⅸ-1類にあたる。24は3個体が癒着した陶器片である。天目茶碗とみられる。25・26は土師器の小皿で25は口径7.4cm、26は7.8cmを測る。ともに底部には回転糸切が認められる。27は滑石製石鏝の再加工品である。28・29は3012の南側、横板や杭の周辺で出土した遺物である。28は体部外面に鎬蓮弁文を有する。龍泉窯系青磁碗Ⅲ類にあたる。29は見込み内面に魚の貼付文を有する。龍泉窯系青磁碗Ⅲ類にあたる。

30～38は3013に関連する遺物である。30は白磁皿。口縁端部が口壳で白磁皿Ⅸ類にあたる。31は龍泉窯系青磁碗。32は龍泉窯系青磁碗Ⅲ-3a類である。33は土師器小皿で口径8cmを測る。34～36は土師器の坏。33～36はいずれも底部に回転糸切が認められ、34では板状圧痕もみられる。37は東播系須恵器の捏鉢で内面底部は使用により器面が摩耗している。38は土師質土器の鈎付き鍋で鈎上面には吹きこぼれによる痕跡がみられる。

39～41は暗渠で出土した。39は土師器小皿で口径8cm、40は土師器坏で口径11.4cmを測る。ともに底部には回転糸切が認められる。41は白磁皿。口縁端部が口壳で白磁皿Ⅸ-1類にあたる。

(2) 木桶 (図9・10)

標高約1.65mで天板付きの木桶が検出された。木桶は3012・3019に直交し、主軸をN-10°-Wにとる。天板と側板、横板、丸杭で形成され、底板は検出されていない。側板は1枚もしくは2枚重ねて形成されている。側板の中には船体の部材を転用したものが認められる(図10-42)。42は長さ178cm、最大幅21.3cmを測る。ホゾ穴が1ヶ所認められ、3ヶ所の凹みにはチョウナハツリの痕跡が認められる。42やその他の側板は直径2～3cm、長さ約12cmの短小な丸杭で内外を固定されており、木桶の内法は20～22cm、高さは約16cmを測る。側板の上には少なくとも7枚の横板が置かれ、その上に天板が設置される。なお、北側には天板の高さの調整のためか、横板と天板の間に板が1枚敷かれていた。天板は割れていたものの、2枚の板で構成されており、南側の天板は長さ約170cm、幅約50cm、北側は長さ154cm、幅56cmを測る。北側の板には直径2～3cmの穿孔が3ヶ所認められる。天板上面の高さは北端で標高約1.7cm、南側で標高約1.55cmを測り、南側に向かって傾斜している。図6に示すように、木桶南側の側板下面は3012側板上面の高さとはほぼ一致することから3019・3012・3013・暗渠設置といった一連の埋め立て行為後に設けられたものと考えられる。木桶内部では時期を示す遺物は出土しておらず明確な時期は不明であるが、側板の下面が3012内側客土上面と暗渠上面に接していることから13世紀後半～14世紀前半に設置された可能性が高い。

なお、調査区の北西隅では標高約 1.3m で 3019・3012 に直交する側板と丸杭が検出された（図 6）。側板の厚みは薄く、杭も短小であるため、土留遺構ではなく上述した木樋と同様の構造物であった可能性があるが、大半が調査区外へと続くため、詳細は不明である。

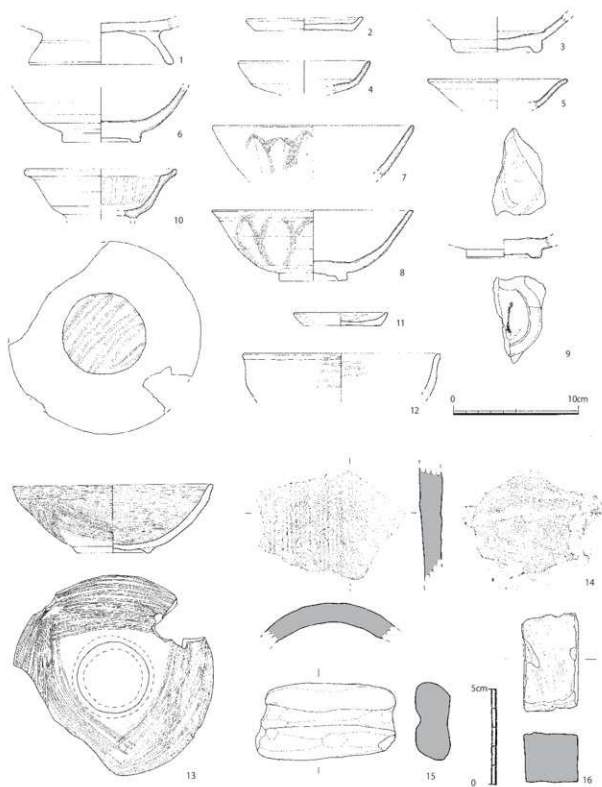


図 7 下面土留遺構出土異物実測図 1 (1/3・1/2)

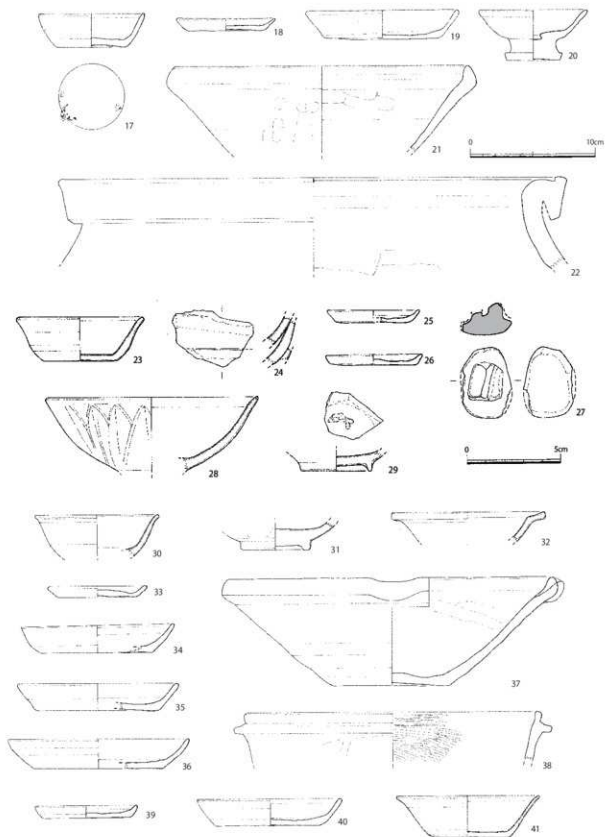


图8 下面土留遺構出土遺物実測図2 (1/3·1/2)

(3) 溝

SD3014 (図11)

調査区の西側に位置する。溝の東端では横板が南に1枚、北に2枚設置されており、その内外に杭が検出された。杭が斜めに打ち込まれているため、南北に設置された横板の断面は逆八の字を呈する。北側で検出された横板の西端は木樋側板の南端に隣接しており、横板上面の標高と木樋側板の標高が近いことから、木樋からの排水を受けるために横板が設置された可能性がある。なお、3014の西側では杭のみが数本検出され、形状や法量が東側で検出された杭に類似するため、本来は横板が連続して設置されていた可能性も考えられる。出土遺物の年代から14世紀初頭に推定される。

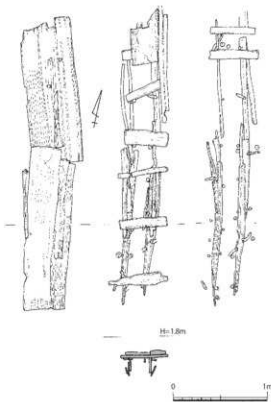


図9 木樋実測図 (1/40)

出土遺物 (図11)

43は土師器小皿で口径8cm、44は土師器杯で口径約12.6cm、器高2.9cmを測る。ともに底部には回転糸切の痕跡が認められる。45は口縁端部が口禿で白磁皿Ⅹ類にあたる。46は陶器の搦鉢で外面の色調は赤灰色～オリーブ黄色を呈する。備前窯産。

SD3007 (図12)

調査区の中央に位置し、東西方向に延びる。全体を検出できておらず、一連の溝ではない可能性も考えられる。以下ではSD3007とその周辺で検出された板と杭について報告する。SD3007は標高約1.4mで検出され、最深部の標高は約1.25mを測る。3016～3018の柱穴列に切られる。出土遺物の年代から13世紀中頃～14世紀初頭に推定される。

SD3007の上面では板が3枚並んだ状態で検出された。検出面の標高は約1.5mである。東端で検出された板には凹部があり、船体の部材を転用したものとみられる。最大長約84cm、最大幅約10cmを測る。

調査区中央、SD3007の東側で板が検出された。検出面の標高は約1.45mである。板の検出長86cm、最大高は約20cmを測る。調査区内で唯一縦方向の木目が見られ、他とは異なる。また、さらに東側では標高約1.5mで横板1枚と杭3本が検出された。検出面の標高は約1.5mである。横板の最大長は約132cm、最大幅10cm、杭の直径は約2cm、最大長約44cmを測る。横板

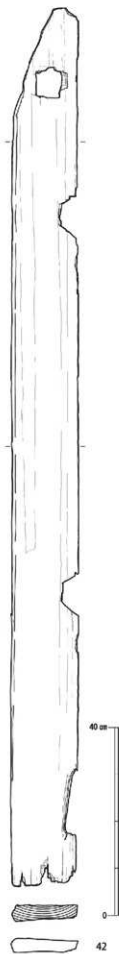


図10 木樋使用木器実測図(1/8)

が杭で固定されていることから土留遺構の可能性が考えられる。

出土遺物 (図 12)

47・48 は S D 3007 で出土した。47 は土師器坏で口径約 12.7cm、器高約 2.7cm を測る。底部には回転糸切の痕跡がみられ、口縁端部にはススが付着する。灯明皿か。48 は龍泉窯系青磁坏とみられ、見込み内面に魚の貼付文を有する。龍泉窯系青磁坏Ⅲ - 3 c 類にあたる。

(4) 柱列

調査区の南西側 (柱列 1) と南東側 (柱列 2) で計 2 カ所の柱列が検出された。

柱列 1 (図 13)

南西側では柱穴を検出できたため、S P 3016 ~ S P 3018 の遺構番号を付した。いずれも暗褐色粘質土を埋土とする。S P 3018 は標高約 1.9m で検出された。柱は約 70cm 残存しており、柱の最大径は約 10cm である。掘方は 54cm × 68cm の楕円形を呈する。底部には根石が 2 石敷かれ、掘方最深部の標高は約 1.1m を測る。S P 3016 と 3017 は標高約 1.35m で検出され、掘方最深部の標高はともに約 0.95m である。S P 3016 では根石が 3 石積まれ、その上に柱が据えられていた。柱の最大径は約 12cm である。S P 3017 では根石は 1 石のみで、柱の最大径は約 10cm である。S P 3016 では遺物が出土していないが、S P 3017・3018 で出土した遺物の年代から 13 世紀後半 ~ 14 世紀前半に推定される。

出土遺物 (図 13)

49 は S P 3017 で出土した白磁皿である。口縁端部が口禿で白磁皿Ⅹ類にあたる。50・51 は S P 3018 で出土した。50 は土師器小皿で口径約 8.6cm、器高 1.5cm を測る。底部には回転糸切の痕跡が認められる。51 は龍泉窯系青磁碗で、外面体部下位には鎬蓮弁文がみられる。

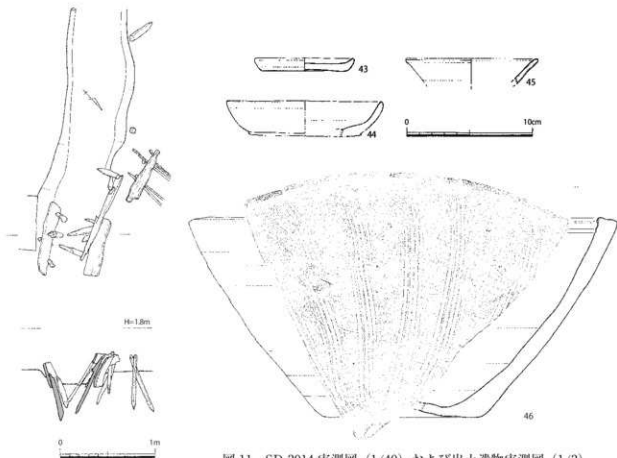


図 11 SD 3014 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)

柱列 2 (図 13)

調査区南東側で検出された柱列である。根石を有する柱が計5ヶ所認められ、柱にはそれぞれグリッド番号を付して取り上げた。柱最底部の標高は約1.0～1.2mである。柱列周辺は茶褐色の腐食土に覆われ、柱穴は検出できていない。I-1①とI-4の柱間は約1.9m、I-4とH-4の柱間は約1.2m、I-1①とG-1の柱間は1.45mを測り、G-1柱は主軸からややずれる。柱はI-4が最も残存しており、残存長約70cm、最大径約12cmを測り、I-1①の柱は最大径約20cmを測る。H-4の柱では根石が4石認められる。また、I-4の北側には方形の柱が2本検出された。I-4・H-4の周辺では杭が4本検出されているが、方形の柱も含め、用途は不明である。根石直下の包含層で出土した遺物の年代から13世紀後半～14世紀前半以降に柱列が設置されたことが推定される。

出土遺物 (図 13)

52～56は根石直下の包含層で出土した。52は白磁皿である。口縁端部が口禿で白磁皿Ⅸ-1類にあたる。53は龍泉窯系青磁碗である。内面見込みに細い草花文様の印刻がみられ、碗Ⅱ類に分類される。54は白磁の皿もしくは合子の身とみられる。内面に細かな陽刻花文がみられ、白色釉が底部の中心を除いて施軸される。景德鎮窯産か。55は龍泉窯系青磁坏である。体部外面に鎊蓮弁文を有し、坏Ⅲ類にあたる。56は陶器の壺である。胎土は細かな黑色粒が混じり、灰色を呈し、器面には褐釉が施軸される。中国産とみられる。

(5) 井戸

SE 3022 (図 14)

調査区北東側で井戸が1基検出された。検出面の標高は約1.35mを測る。標高0.4mで湧水し、それ以下は未掘である。少なくとも2段の木桶が井戸側に使用されており、上段は幅約10cm、長さ約80cmの板21枚で形成され、タガは2本認められる。下段の木桶は完掘できていないが、22枚の板で形成される。3012および3019を切る遺構と推定されるが、出土遺物の年代は13世紀後半～14世紀前半で明確な時期差は認められない。

出土遺物 (図 15)

57～62はいずれも掘方で出土した。57は白磁皿である。口縁端部が口禿で白磁皿Ⅸ類にあたる。58は龍泉窯系青磁碗である。内面見込みに文字とみられる印文を有する。59は天目茶碗で胎土には細かな白色粒、黑色粒を含む。60は陶器片の周囲が打ち

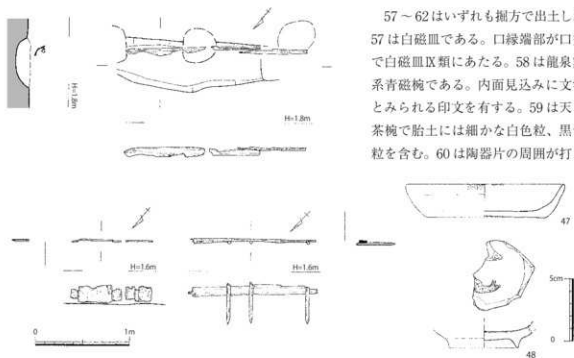


図 12 SD 3007 と関連遺構実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)

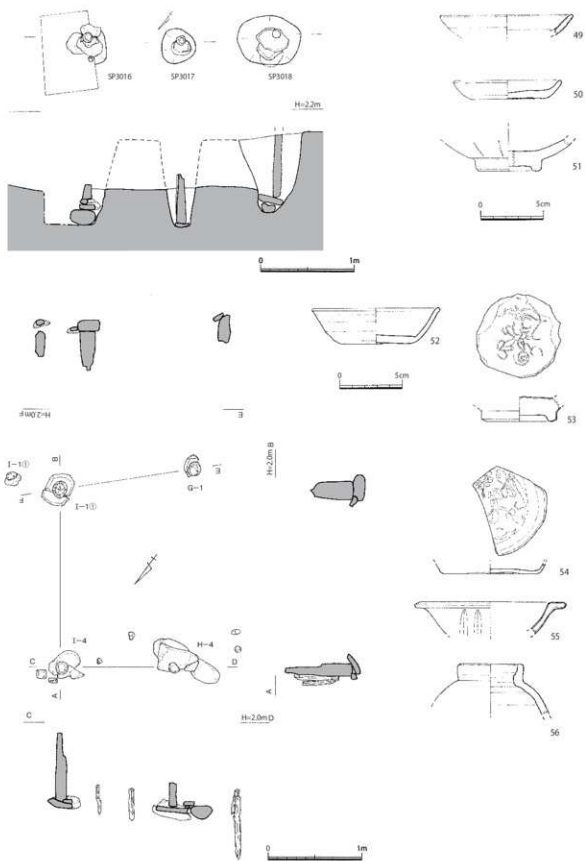


图13 柱列実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)

欠かれており再加工作品とみられる。61は土錘である。最大径1.4cm、孔径0.4cmを測る。62は不明石製品で上面には研磨痕が認められる。磨石か。

(II) 上面の遺構と遺物

(1) 土留遺構 (図16)

調査区北東隅で横板と杭が並行して検出された。検出面の標高は北側で約2.0m、南側で約2.45mを測る。北側で検出された横板と杭は下面で検出された3012に類似しており、横板を上下2段に重ね、横板の上面と杭の上面が揃うように杭が打ち込まれている。調査区の北東隅で検出され、調査区外へと続いている可能性があるが、調査区内では少なくとも上段で2枚、下段で1枚の横板が検出され、横板の最大長は約154cm、最大幅約12cmを測る。横板の中には船体の部材を転用したのも認められる(図17-63)。63は最大長約112cm、最大幅約11cm、厚さ約1.6cmを測る。ホゾ穴を1ヶ所所有し、チョウナハツリの痕跡が認められる。杭は計6本検出され、杭の最大径は約2cm、最大長は約60cmである。出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。

南側では横板1枚と杭1本が検出された。横板の検出面の標高は約2.1m、横板の残存長は約110cm、最大幅約10cm、厚さ約1cmである。杭は最大長約60cm、最大径約10cmで検出面の標高は約2.45mであった。横板と杭の検出面の標高差が30cm以上あるため、同一の遺構に用いられたものではない可能性がある。北側の土留遺構と同様に出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。

(2) 建物跡

S B 1021 (図18)

調査区の南側で検出された。溝状の掘方の中には礫が充填しており、検出面の標高は約2.5m、最深部の標高は約2.1mを測る。S E 1001に切られ、掘方の大半が調査区外へと続いたため、全体の規模は不明であるが、L字状に検出された溝の東西長は約6.0mと推定される。蔵のような建物の基礎の可能性が高い。出土遺物の年代は14世紀代のものが多いが、黄褐色粘質土の整地層を切るため、15～16世紀以降の時期が想定される。

出土遺物 (図18)

64～66は土師器の小皿である。64・65は下層、66は最下層で出土した。64の口径は約8.6cm、65は約8.9cm、66は約7.2cmで、64の底部では回転糸切、65・66の底部では回転糸切と板状圧痕がみられる。67～69は土師器の坏である。67・68は下層、69は最下層で出土した。67の口径は約14cm、

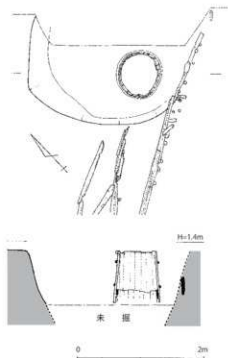


図14 SE 3022実測図 (1/60)

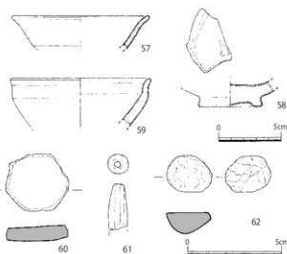


図15 SE 3022出土遺物実測図 (1/3・1/2)

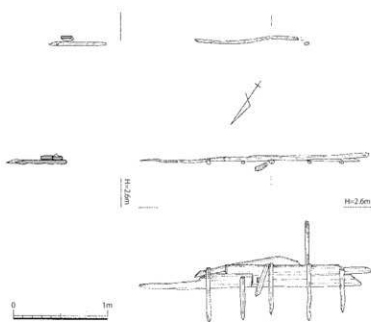


図16 上面土留遺構実測図 (1/40)

68は約13cmで、ともに底部では回転糸切がみられる。69は口径約13cm、器高2.4～2.8cmを測る。底部では回転糸切と板状圧痕がみられ、内面にはススが附着する。灯明皿か。70は下層で出土した龍泉窯系青磁碗である。口縁端部に輪花を有し、体部外面に蓮弁文、内面に片刀の草花文とみられる施文が施される。碗Ⅳ類か。71は下層で出土した瓦質火鉢である。復元口径39.6cm、器高約12.2cmを測り、浅鉢形で平面形は円形を呈する。器面はヘラミガキで調整され、外器面上部には菊花文のスタンプを有する。72は上層で検出された平瓦である。胎土には細砂粒と金雲母を多く含む。全体的にナデによる調整が施される。後世の混ざりこみか。73は直径約3.5cmの石球である。

(3) その他の遺構

調査区南西側検出遺構

S P 1003

検出面の標高は約2.45m、最深部の標高は約2.0m、直径約30cmの円形の掘方である。土師器小皿(図21-74)が完形で出土し、口径は約7.3cm、底部に回転糸切がみられる。

S K 1004 (図19)

検出面の標高は約2.45m、最深部の標高は約2.4mを測る。掘方は調査区外へと続くため全形は不明である。

出土遺物 (図21)

75は土師器小皿で口径約6.8cm、底部には回転糸切と板状圧痕がみられる。76は土師器坏で口径約12.6cm、器高2.3cm、底部には回転糸切が認められる。77は土師器皿を再加工した土製品とみられ、側面には研磨痕がみられる。



図17 上面土留遺構使用木器実測図 (1/8)

S K 1006・1007 (図19)

検出時は2つの土坑の切り合いとして1006・1007の番号を付していたが、掘削後同一の土坑と判断した。検出面の標高は約2.45m、最深部の標高は約2.35mである。1005に一部削平されるが、掘方は

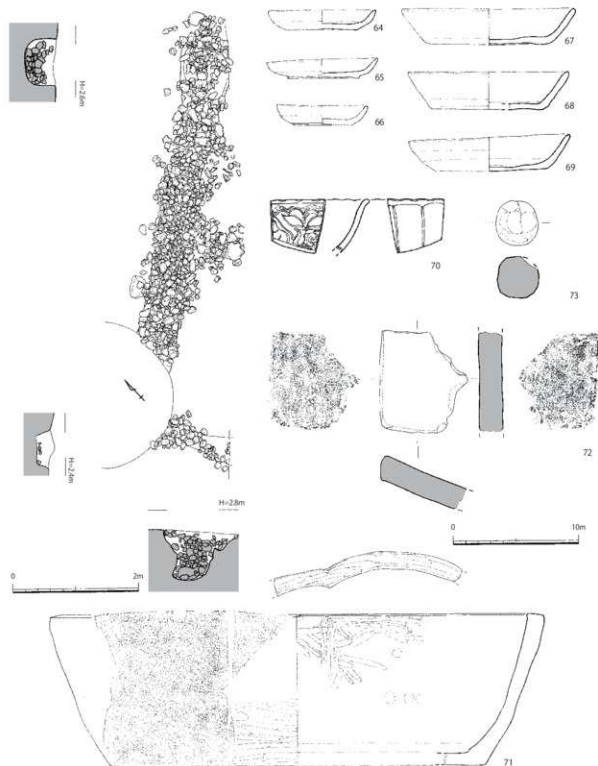


図18 SB 1021 実測図 (1/60) および出土遺物実測図 (1/3)

隅丸長方形を呈し、底面は平坦である。

出土遺物 (図 21)

78 は土師質の鍋である。内面にはハケ状工具によるナデ、外面にはユビオサエの痕跡とススが多く付着する。79 は土師器小皿で口径約 5.9cm、底部には回転糸切がみられる。口縁端部にススが付着し、灯明皿と考えられる。

S K 1009 (図 19)

検出面の標高は約 2.45m、最深部の標高は約 2.3m である。掘方の東側を 1008 に削平されるが、掘方は隅丸長方形を呈し、底面は平坦である。

出土遺物 (図 21)

80 は土師器小皿で口径約 7.5cm、底部には回転糸切がみられる。

S X 1045・1046

調査区西南側ではかたく、しまった黄褐色土が 30～40cm ほど厚く堆積し、周囲には布掘の柱穴列にともなう根石とみられる石と礫がまともって確認された。これらの石の集積には SX1045・1046 という遺構番号を付した。根石とみられる石の上面は標高約 2.45m である。黄褐色土粘質土の整地層は土間の可能性も考えられ、出土遺物の年代から 15～16 世紀代に推定される。

出土遺物 (図 21)

81～93 は S X 1045 周辺で出土した。81～85 は土師器小皿である。口径 7.2～7.5cm のものが多

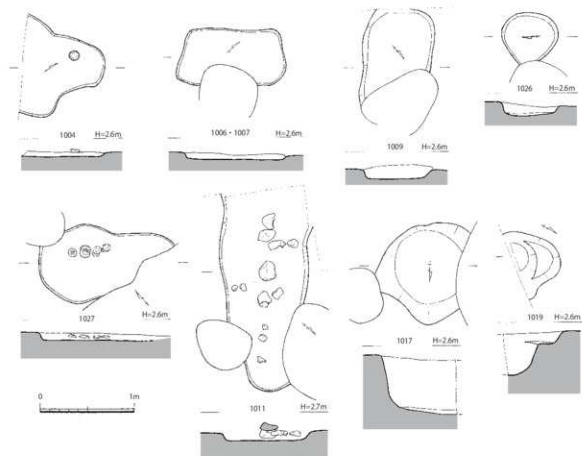


図 19 上図その他遺構実測図 (1/40)

く、底部には回転糸切がみられる。84は口縁端部に油煙がみられ、灯明皿と考えられる。86～88は土師器環である。いずれも口径は12～13cmで底部には回転糸切がみられる。89は龍泉窯系青磁皿である。口縁端部に輪花を有し、内面見込みには菊花文と「宋」のスタンプがみられる。90は龍泉窯系青磁盤。内面には波文様が施される。91は青磁の双耳小壺である。外面体部上半部に陽刻文が認められる。胎土の色調は灰白色、軸は緑灰色を呈する。92は粉青沙器の小椀である。胎土には1mm以下の微細な白色粒を少量含む。93は雑釉陶器の皿である。底部には目跡が認められる。胎土の色調は灰オリブ色、軸は無色である。92・93はいずれも李朝期とみられる。

94～99は1046周辺で出土した。94～96は土師器小皿でいずれも底部に回転糸切がみられる。94は口径約6.4cm、口縁端部にスガが付着する。灯明皿か。97は土師器環の完形品で、口径12.1cm、器高2.6cm、底部には回転糸切がみられる。98は雑釉陶器の椀である。胎土には1mm大の白色粒を多く含む、色調は灰色を呈する。透明釉で内面下位と外面高台付近に釉だまりがある。内面と高台には目跡が確認できる。99は土師質の播鉢。胎土には1～3mm大の白色粒を含む。

調査区北西側検出遺構

S X 1010

検出面の標高は約2.45m、最深部の標高は約2.3mである。土器片や銅銭が出土し、出土遺物の年代から15世紀代に推定される。

出土遺物 (図22)

100～108がS X 1010で出土した。100・101は土師器小皿で100は口径約7.4cm、101は口径約8.2cmを測る。いずれも底部には回転糸切がみられる。101の内面にはスガが付着し、灯明皿と考えられる。102は土師器の脚付皿である。口径約7.8cm、器高約3.4cmを測り、器面は回転ナデで調整される。103はピロースクタイプⅢ類の白磁椀である。胎土には微細な黒色粒を少量含む、色調はやや灰色がかった白色を呈する。内面見込みには草花文とみられる施文が認められる。104は天目茶碗。胎土には1mm大の白色粒を含む、色調は灰褐色を呈する。軸の色調は黒色で光沢がある。105は粉青沙器の小椀である。外面には雷文、内面にも象嵌による施文がみられる。胎土には1mm以下の微細な白色粒を含む、色調は暗灰色を呈する。106・107は土師質の鍋である。106は復元口径約25cm、107は復元口径約33cmを測る。ともに内面ではハケメ、外面ではハケメとユビナデの調整が認められる。106では器面全体にスガが付着する。108は直径約4.2cmの石球である。敲打後研磨による調整がみられる。

S K 1026 (図19)

検出面の標高は約2.5m、最深部の標高は約2.35mである。掘方は直径約60cmの楕円形を呈し、底部は平坦である。出土遺物の年代から15世紀代に推定される。

出土遺物 (図22)

109～113がS K 1026で出土した。109は土師器小皿で口径約7.6cm、底部には回転糸切と板状圧痕が認められる。110・111は龍泉窯系青磁椀、112は龍泉窯系青磁皿である。110・112は胎土に1mm以下の黒色粒を少量含む、111は1mm以下の黒色粒と白色粒を少量含む。いずれも内外に貫入がみられる。113は粉青沙器の壺である。口径約8.2cm、残存高8.8cmを測る。胎土には1mm以下の黒色粒

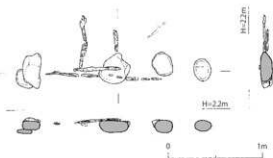


図20 SX 1042 実測図 (1/40)

と白色粒を少量含み、色調は灰色を呈する。軸の色調は明オリブ灰色である。

S K 1027 (図 19)

検出面の標高は約 2.45m、最深部の標高は約 2.35m である。楕円形を呈する掘方は S X 1010 と S K 1026 に切られる。底面付近で土師器の小皿や坏が並んだ状態で出土した。

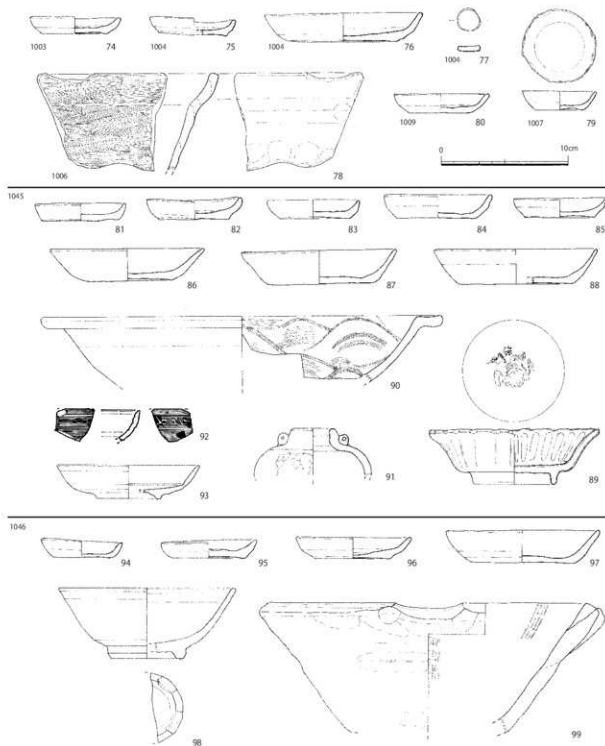


図 21 上面その他遺構出土遺物実測図 1 (1/3)

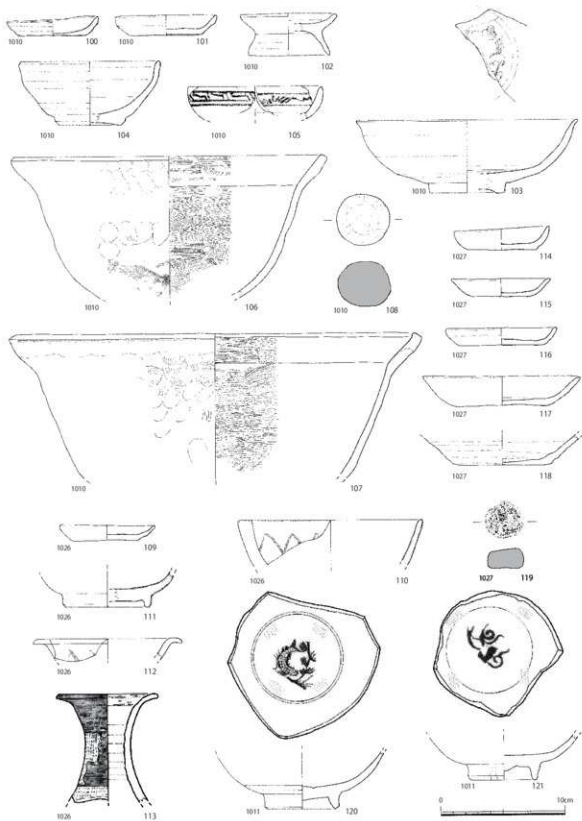


図22 上面その他遺構出土遺物実測図2 (1/3)

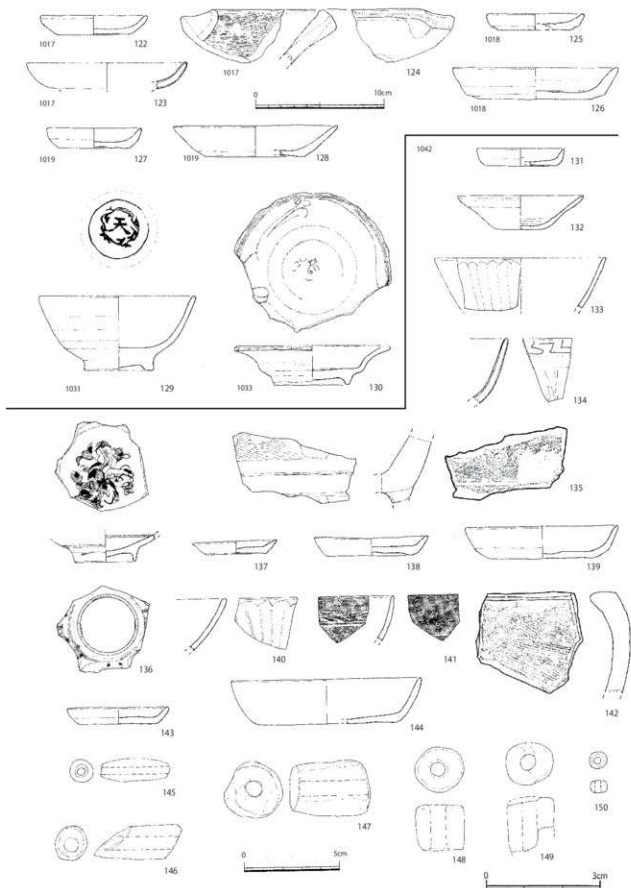


図23 上面その他遺構出土遺物実測図3 (1/3・1/2・1/1)

出土遺物 (図 22)

114～119がSK 1027で出土した。114～116は土師器小皿である。114の口径は約7.7cm、115の口径は約8.0cmでともに底部には回転糸切と板状圧痕が認められる。116の口径は約9.0cmで底部には回転糸切がみられる。117は土師器環で口径約12.7cm、器高2.4～2.5cmを測る。底部には回転糸切がみられる。118は土師器の環とみられ、底部にはヘラナデによる調整が施される。119は土玉である。直径約2.9cm、厚さは約1.7cmを測る。色調は浅黄橙色を呈し、全体的にナデによる調整がみられる。

S X 1011 (図 19)

調査区の北西端に位置する。検出面の標高は約2.5m、最深部の標高は約2.4mである。最大幅0.95m、検出長約2.2mの溝状の掘り込みで、中には石が並んで検出された。布掘り状遺構の可能性がある。出土遺物の年代から14世紀中頃～後半に推定される。

出土遺物 (図 22)

120・121がSX 1011で出土した。120・121は龍泉窯系青磁碗である。120は内面見込みに片彫りの魚と藻のような施文が認められる。軸は薄く均一で色調はオリーブ灰色を呈し、高台の境付近では褐色に発色する。120は内面見込みに魚と草のような文様が片彫りで施文される。軸は光沢があり、オリーブ灰色を呈する。うすく均一に施軸されている。

調査区南側検出遺構

S K 1017 (図 19)

検出面の標高は約2.5m、最深部の標高は約1.85mを測る。SB 1021の下面で検出され、SE 1001に切られる。掘方は直径約1mの円形を呈する。

出土遺物 (図 23)

122～124がSK 1017で出土した。122は土師器小皿で口径約8.4cm、底部には回転糸切と板状圧痕が認められる。123は青磁皿である。外面は無文で、光沢のあるオリーブ灰色の軸が施される。124は瓦質土器の描鉢である。

S P 1018

検出面の標高は約2.5m、最深部の標高は約2.2mを測る。楕円形と推定される掘方はSK 1019に切られる。

出土遺物 (図 23)

125・126がSP 1018で出土した。125は土師器小皿で口径約7.6cm、底部には回転糸切がみられる。126は土師器環で口径約13cm、器高2.5cmで底部には回転糸切と板状圧痕が認められる。

S K 1019 (図 19)

検出面の標高は約2.5m、最深部の標高は約2.05mを測る。SP1018を切り、円形と推定される掘方は調査区外へと続く。北側には底面から約30cmの高さで平坦面が認められる。

出土遺物 (図 23)

127・128がSK1019で出土した。127は土師器小皿で口径約7.4cm、底部には回転糸切と板状圧痕が認められる。128は土師器環で口径約12.8cm、器高2.4cm、底部には回転糸切がみられる。

調査区北側検出遺構

S K 1031

検出面の標高は約2.4m、最深部の標高は約2.1mを測る。南側にはテラス状の平坦面がみられ、北側は調査区外へと続く。

出土遺物 (図 23)

129 は龍泉窯系青磁碗である。見込みには「天」と草のような施文が認められ、高台には目跡がある。胎土の色調は灰白色、軸はオリーブ灰色を呈する。15 世紀前半か。

S P 1033

検出面の標高は約 2.4m、最深部の標高は約 2.3m を測り、楕円形の掘方を呈する。

出土遺物 (図 23)

130 は龍泉窯系青磁後花皿である。胎土には 1mm 以下の白色粒を少量含み、色調は灰色を呈する。光沢のある緑灰色が施軸され、高台には目跡がみられる。内外全体に貫入がある。15 世紀後半か。

調査区中央検出遺構

S X 1042 (図 20)

根石とみられる石が 4 石並んだ状態で検出され、その間に木器が出土した。南側にも根石が並んでいた可能性も考えられるが、S E 1001 に隣接するため、詳細は不明である。いずれの石も上面の標高は約 2.1m、底面の標高は約 1.95m を測る。木器と根石の関係性は不明だが、木器は土壁の骨組みの可能性がある。根石の間でガラス製品が 3 点出土していることから何らかの祭祀が行われた可能性が考えられる。出土遺物の年代から 15 世紀代に推定される。

出土遺物 (図 23)

131 ~ 150 が S X 1042 で出土した。131 ~ 136 は上層で出土。131 は土師器小皿で口径約 6.8cm、底部には回転糸切がみられる。132 は土師器の坏で口径約 9.8cm、底径約 4.0cm を測る。底部には回転糸切がみられる。133・134 は龍泉窯系青磁碗である。133 は外面に細蓮弁文が施文され、内外に貫入がある。134 は外面上部に雷文が施され、軸の色調は明緑灰色を呈する。135 は瓦質土器の脚付方形火舎である。外面には三重門のスタンプがみられ、脚部との境に沈線が巡る。136 は青花蓮子碗である。胎土の色調は灰白色、軸は紺青色を呈する。内面見込みに目跡がわずかに認められる。16 世紀前半とみられ、上面の混ざりこみの可能性がある。137 ~ 142 は下層で出土。137 は土師器小皿で口径約 6.6cm、底部には回転糸切がみられる。138 は土師器皿で口径約 9.0cm、底部には回転糸切が認められる。内外面が一部黒色化しており、灯明皿と推定される。139 は土師器坏で口径約 12.0cm、器高約 2.5cm を測り、底部には回転糸切がみられる。140 は龍泉窯系青磁碗である。胎土には 1mm 以下の黒色粒を少量含む。13 世紀。141 は高麗青磁碗で内外面に象嵌が施される。14 世紀末 ~ 15 世紀前半か。142 は瓦質土器の浅鉢である。外面は剥落するが、内面にはナナメハケメとナデの調整が認められる。143 と 144 は最下層で出土。143 は土師器小皿で口径約 8.0cm、144 は土師器坏で口径約 15.0cm、器高約 3.5cm を測る。ともに底部には回転糸切がみられる。145 ~ 147 は土鎌である。145・146 は上層、147 は最下層で出土した。145 は最大径 1.2cm、146 は最大径 1.8cm、147 は最大径 2.8cm を測る。148・149 は上層で出土したガラス製白玉である。148 は完形で最大径 1.3cm、コバルトブルー色である。149 は最大径 1.2cm、淡白色を呈する。150 は完形のガラス小玉である。直径 4.5cm で、水色を呈する。

(Ⅲ) その他の特殊遺物 (図 24)

151 は白磁碗で高台に墨書がみられる。上面包含層出土。152 は青磁碗で内面見込みに花文が施され、高台には「十一」が朱書きされる。上面包含層出土。153 は青磁碗で高台に墨書がみられる。下面包含層出土。154 は陶器の壺もしくは瓶である。胎土には微細な白色、黒色粒を含み、色調は褐灰色を呈し、黒褐色の軸が施軸される。上面包含層出土。155 は土師器皿の再加工とみられ、穿孔が 1ヶ所認められる。S K 2023 出土。156 は不明土製品で底部には回転糸切がみられる。上面包含層出土。

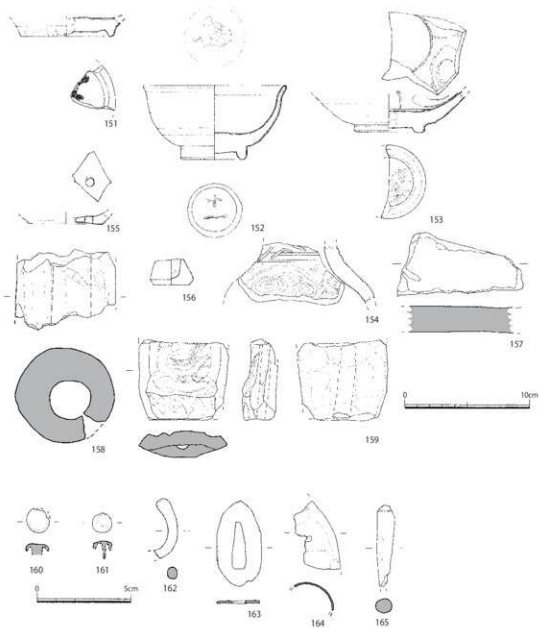


図24 特殊遺物実測図 (1/3・1/2)

157は不明土製品で器面はヘラナデにより調整され、上面が赤色化している。炉の上面か。上面包含層出土。158は輪の羽口である。上面～下面の包含層出土。159は仏像をかたどった土製品で色調は赤褐色を呈す。阿弥陀如来の座像とみられ、表面には型押しで形成された定印と袈裟、蓮華座の部分が残存する。土製品の中央には断面かまほこ形の穴が貫通しており、製作時の芯の抜け穴の可能性がある。160～165は青銅製品である。160は直径約1.3cmで飾り鉾か。S B 1021下層出土。161は直径約1.0cmで飾り金具か。S K 2022出土。162は不明銅製品。調査区西壁清掃時出土。163は刀装具である。S B 1021下層出土。164は不明銅板で断面は丸味を帯びる。上面包含層出土。165は不明製品で、棒状を呈する。上面包含層出土。

IV. まとめ

本調査地北側の下面で埋め立てに関連する遺構が検出された。これらの遺構は「息浜」の湿地の埋め立てに起因すると考えられる。まず、3019の土留遺構で標高約1.0mまでを埋め立て、3013で一部足場を整備した後、3012の土留遺構で標高約1.3～1.4mまでを埋め立てている。最初の土留である3019の横板は3012に比べて幅が広く、使用された杭も長大なものが多い。3019では西側と東側で土留の様相にやや違いがあり、西側では幅の広い横板を長大な杭で均等に打ち込んでいるのに対し東側では幅の狭い横板を使用し、西側より短小な杭を乱雑に打ち込んでいる。3019と3013、3012の横板の内側（北側）には泥土と粗砂で形成された灰茶褐色土の客土が一面に認められた。この客土で出土した遺物は一部古代のものも含むが、13世紀後半～14世紀前半の年代に推定される。また、3019・3012に並行するように設置されていた暗渠においても同時期の遺物が出土している。土留遺構と暗渠に交差するような形で天板付きの木桶が検出された。木桶内では時期を示す遺物が出土していないが、3012の内側客土と暗渠に接する形で設置されていることから、3019・3012・3013の土留遺構および暗渠、木桶の設置は13世紀後半～14世紀前半に一連で行われたものと推定される。

古墳時代頃までの息浜は南西から北東に河川が流れており、低く平らな砂嘴であったと考えられている。その後、河川の出口は西に変わり、息浜の背後の旧河道に砂が堆積することで湿地化していき、陸地化が急速に進行した。12世紀初頭にはその一部が埋め立てられ、息浜と博多浜は陸橋でつながるようになる。低地の埋め立ては博多浜側と息浜側の両岸から徐々に進められたと推定されるが、低地が完全に埋め立てられ、陸地化したのは近世初頭であることがわかっている。本調査地で検出された土留遺構は息浜の湿地を埋め立てた痕跡と考えられ、土留遺構の軸の方向から息浜の砂丘の尾根線を基準として設置されたことが推定される。これまでの調査の成果から息浜における町場の軸線は砂丘地形に沿って、元寇防塁に並行していたことが指摘されており、本調査で検出された土留遺構からも同じ様相をうかがうことができる。本調査地の土留遺構は13世紀後半～14世紀前半に推定され、息浜の砂丘北側に元寇防塁が築かれ、息浜の居住域が拡大した時期と符号する。検出された天板付きの木桶は土留遺構の軸にほぼ直列するように設置されているが、息浜におけるこれまでの調査で検出された道路の中で木桶と同様の軸をもつものが認められることから、道路にともなう側溝であった可能性が想定される。

本調査地南側の下面では根石をもつ2つの柱列が検出されている。調査区南東側で検出された柱列に関しては調査区南壁面の土層において柱列の周囲で砂と粘質土が相互に重なる整地層が認められる。また、根石の下では茶褐色の腐植土層が検出されており、これは調査地北側の埋め立て後に南側の湿地に腐植土が堆積し土壌化した結果と推定される。茶褐色の腐植土層で出土した遺物の年代は13世紀後半～14世紀前半に推定され、土留遺構とはほぼ同時期の年代を示している。土の堆積状況から南東側で検出された柱列に関しては北側の埋め立てが終了し、南側の湿地が土壌化した段階で建てられたものと推定される。

上面においては調査地の南側で15世紀～16世紀代に推定される黄褐色粘質土による整地と石基礎が検出されている。黄褐色粘質土による整地は土間、石基礎は蔵などの建物の基礎と想定される。石基礎は調査区外へと続くため全体は把握できていないが、検出できた範囲において石基礎の軸は下面で検出された土留遺構とほぼ並行している。上面で検出された遺構は石基礎以外も同様の様相を示しており、15～16世紀においても息浜の町場の軸線は砂丘地形に沿っていたことがうかがえる。

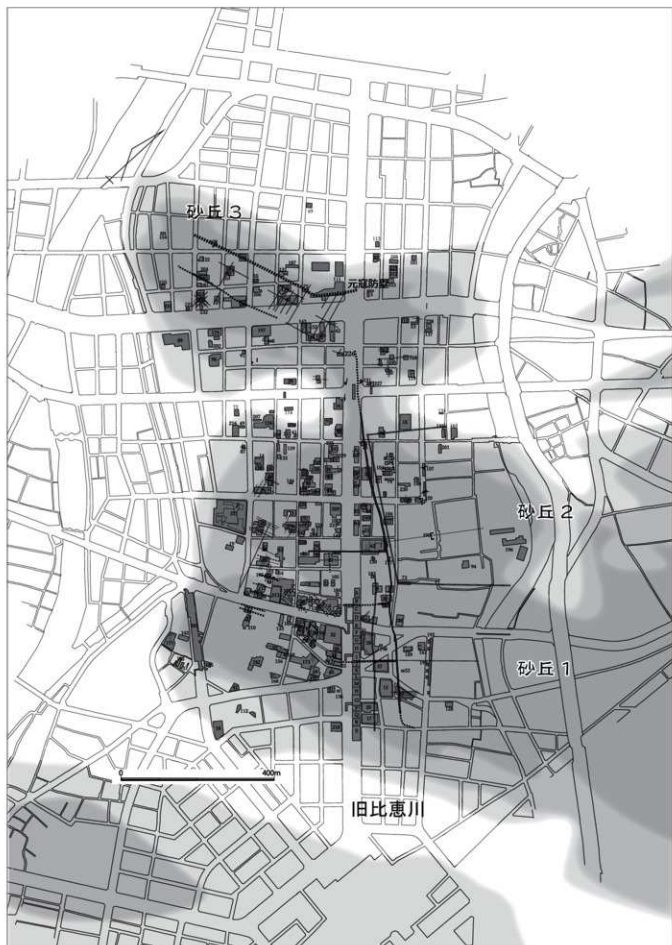


図 26 中世前半の博多遺跡群における道路推定図 (1/1,000)



① I区北半下面木樋天板検出状況
(北西から)



② I区北半下面木樋・土留遺構・SD3014 検出状況
(南から)



③ II区北半下面土留遺構・SE3022 検出状況
(南から)



④ I区北半下面 3012内側客土出土状況
(西から)



⑤ I区北半下面暗渠断面検出状況 (東から)



⑥ SP3017 柱検出状況 (北から)



⑦ SP3018 土層断面 (東から)



⑧ II区南半柱列2 検出状況 (北から)



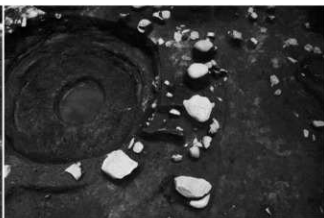
⑨ II区上面土留遺構検出状況 (南から)



⑩ SB1021・SX1042 検出状況 (西から)



⑪ SB1021 断面 (西から)



⑫ SX1042 検出状況 (東から)

ふりがな	はかた 193							
書名	博多 193							
副書名	一博多遺跡群第 226 次調査報告一							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 1481 集							
編者名	松崎友理							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒 810-8621 福岡県福岡市中央区天神 1 丁目 8 番 1 号 TEL.092-711-4667							
発行年月日	2023 年 3 月 23 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
博多遺跡群 第 226 次	福岡県福岡市 博多区前場町 107-1、107-2、108	40134	0121	33° 35' 54"	130° 24' 31"	20190408 ～ 20190620	78.1	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物		特記事項	
博多遺跡群第 226 次	集落	中世		井戸・土坑・建物跡	陶磁器、陶器、漆器、瓦、 青銅製品、鉄製品、ガラス 製品、木製品、人骨		木樋、土留板、杭列	
要約	<p>本調査地は博多遺跡群の中央からやや北、「息浜」の南側端部付近に位置する。標高約 2.5m から調査を開始した。調査区西南側ではかたかく、しまった黄褐色土が 30～40cm ほど厚く堆積し、周囲には布製の柱穴列にともなう根石とみられる石が多数確認された。また、鏝が充填された溝も検出された。蔵などの建物の基礎と推定される。調査区中央北側では標高約 1.7m で天板付の木樋が検出された。さらに標高約 1.3～1.4m と標高約 1.0m で、横板と杭が東西方向に並列した状態で検出された。下段の板の最大幅は約 40cm、杭の最大長は 180cm を測り、埋め立ての土留め板と考えられる。横板の北側（内側）には白色砂が敷かれ、その上には泥土と粗砂で形成された客土が堆積していた。標高 1.0m の段階まで一度埋め立て、その後約 20cm 北側に横板と杭を打ち込み、標高約 1.3～1.4m まで埋め立てたと考えられる。出土遺物の年代から 13 世紀後半～14 世紀前半と推定される。また、調査区南側では標高約 1.1～1.2m で根石を持つ柱列が検出された。</p>							

博多 193

一博多遺跡群第 226 次調査報告一

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1481 集

2023 年 3 月 23 日

発行 **福岡市教育委員会**

福岡市中央区天神 1 丁目 8 - 1

印刷 **ロータリー印刷株式会社**

福岡市中央区港 2 丁目 8 - 9

頁	行/図	誤	正	
30	図26	1/1,000	1/10,000	